

沖

昭和45年創刊 平成28年7月1日発行（毎月一回一日発行）俳句雑誌 沖 第47巻第7号

7
2016

俳句雑誌[おき]



中二階

能村 研三

スポーツと俳句

岩手県北上市にある日本詩歌文学館で六月から来年三月まで、「スポーツと詩歌」という企画展が開催されている。花巻で行われた岩手支部の指導句会にあわせて、詩歌文学館に見に行った。

今回の企画展には、私にも出品依頼があり、一句を色紙に揮毫したものを送った。七つのテーマに分かれていて、私の作品は「空と大地と水と」というコーナーに飾られている。腕立て伏せ地べたに尽きてあたたかしという、句集『滑翔』に収めた句を出品した。

出品に際して、解説にも書いたことだが、私はどちらかというとスポーツ音痴で、子どもの頃から運動神経の良い方ではなかった。今も野球観戦などはするが、自らスポーツに参加することはない。ただ、余力技や技術を必要としない、持久力が勝負のマラソンや腕立て伏せなどは頑張れるところまで頑張った。

卯
波
晴
蛸
壺
干
し
の
口
揃
へ

朝
市
や
地
蛸
二
匹
の
荒
勘
定

菖
蒲
葺
く
座
高
測
定
廃
止
と
や

奔
放
に
朴
の
新
芽
の
紅
翔
て
り

諏訪大社御柱祭

梅 雨 館 隠 れ 部 屋 め く 中 二 階

初 西 瓜 ひ と 擦 り し て 刃 を あ て る

茅 の 輪 潜 る し ば し 猫 背 の つ づ き を り

撓 は ず も よ し 夏 萩 の 溢 れ 咲 き

床 高 に 警 護 の 隠 る 夏 館

浮 島 に ひ と 群 れ 佇 ち の 青 き 葦

枯れし野を強く引き寄せラガー蹴る
一瞬に残塁ふたり野分めく
サーファアの忘れものめく浜焚火
寒泳にゐる筈もなき吾さがす
的を射て直立まもる弓始
泳ぎきり人間くさくなりしかな

私の句で、スポーツに関する句があるか句集を捲ってみたが、初期の頃は詠んでいたものの、最近は少なくなっているようにも思えた。

「スポーツと詩歌」展には、「物故作家作品」の中に先師登四郎の水踏んでゐるさびしさの立泳ぎの句も紹介されている。またこの展覧会に際して歌人で詩歌文学館館長の篠弘先生が書かれている「こ挨拶」の中に土岐善麿の

渾身のちからに投げし槍のひかり
消えつとみればなほも飛びある
という歌と、登四郎の
春ひとり槍投げて槍に歩み寄る
の句が紹介され、「この歌と句からは共に心身の力を出しきった爽快感が溢れます。」と解説文があったことも嬉しいことであった。

蒼茫集

白 靴

森岡 正作

そよ風の二刷き三刷き田水張る
老鶯に耳を貸しゐる調律師
白靴の汚れに出端くじかるる
獣道来てすばしこき山女釣
若鮎の腸の苦みも母郷なり
青梅や男の子の尻は叩くべし

雨宿り

安居 正浩

子燕の声の降り来る雨宿り
一病はそれはそれとし蓬餅
砂時計私が消えてゆく暮春
弱音吐くやうに花種蒔きにけり

白鷺の歩み試歩めく余花の雨
母の日や出かける妻の勝負服

自 在

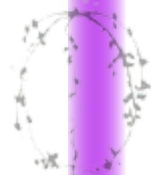
成宮紀代子

暦剥ぐ音直線に五月来る
変貌の街を忘れず初燕
丸ビルのパーラーに逢ふ余花あかり
クレープのクリームふふと溶け卯月
茎立の不揃ひと言ふ自在かな
円錐の味噌かぐはしき立夏かな

波 形

久染 康子

遠足の列波寄せ来れば波形に
青葉若葉へ雨音の齒切れよし



夏野いま育ち盛りや風渡る
万緑叢中風の音とみづの音
髪湿る茅花流しに流されて
ふらり来て嫁しき娘昼寝して居りぬ

隙あらば 藤原照子

実験めく土筆おひたし卵とち
隙あらば咲き町内の芥子の花
「富士山」ナンバー新緑の唐松帯
霧ヶ峰晴れ鈴蘭とグライダー
単線や花アカシアに川に沿ひ
オーブンカーで送らるる羽目若葉風

風のたはむれ 田所節子

絹光りしてひこばえの命噴く
名水を買ひ置く八十八夜かな
助手席にまぶたの重く藤の花
ベランダに雀来てゐる清和かな

葉ざくらや過ぐれば記憶すぐ褪せて
白牡丹風のたはむれ咏へをり

掌 上 今瀬一博

筍のそこのけと空目指しけり
三門を入れば掌上白牡丹
若楓編笠深き大師像
白牡丹堂の裏より風来たる
ぼうたんの揺れて本堂浮くごとし
白にしるかさねて暗む牡丹かな

五月三日の目玉焼 頓所友枝

初めてのナイフとフォーク昭和の日
地震止まず囀りも又祈りめく
初鮎や良き火加減の跳ね姿
崩れ易き五月三日の目玉焼
楼門の反りを見下す躑躅山
麦秋や耳をくすぐる恋話

御柱祭 矢崎すみ子

御柱祭いま巡礼の日が昇る
東風や東風信濃一宮幟旗
千早振る神千年の祭幣
生一本神に捧ぐる御柱祭
大木も氏子も神の雪解川
木遣歌果つ浮城の初桜
置き去り 千田百里

ニッケ・コルトンブラザ吟行三句

おりひめも教へ子と聞く登四郎忌
夏はもうすぐ噴水前で待てと言ふ
春たのしスペイン階段にて撮られ
酒肆に満つ憲法論や五月憂し
青嵐を煽りハーレー・ダビッドソン
置き去りのやうな夏野の一輛車

翻車魚 楠原幹子

駢蕩や翻車魚のこのアンバランス
原稿は今なほ手書き桜草

行く春の机上に雲形定規かな
溪流は新緑の音奏でをり
青ほほづき自分育ては死ぬるまで
白靴やヴェニスは夢のままに過ぎ
地平へと 林昭太郎

夏来る真白き雲を先立てて
街路樹は新樹に白線まつすぐに
鍵盤を走りだす指新樹の夜
読み耽る紙魚の世界に深入りし
胸襟も窓も全開 聖五月
地平へと消ゆるハーレー麦の秋
行雲の人 大畑善昭

啄木も行雲の人五月来る
霞む杜青面金剛踏ん張れり
啄木の客気を胸に青き踏む
熊谷草その幌はみな男の秀
敦盛草いまは雀の嘴ほどに
十分に泳がせ仕舞ふ五月鯉

緑牡丹

上谷昌憲

樹木医の真白な木槌夏来る
みどりごの動体視力夏の蝶
何代の江戸つ子ならむ燕の子
緋牡丹に補色の滲む真昼かな
白牡丹見る深淵を覗くごと
草色の時の弛びや緑牡丹

溺れさう

吉田政江

早苗田の植ゑすぢ点で繋ぎけり
開園へ苔ととのふ牡丹寺
蜷の道一筆書きの「る」の字揺れ
蝌蚪の群多数派にゐて溺れさう
対岸をつなぐ太綱こひのぼり
調律の和音緑雨へとけ入りぬ

雲雀野

宮内とし子

雲雀野に正午のチャイム届きけり
生れてすぐ立ち上がる牛花杏
風五月広げて大きな旅の地図

貝殻の径ある島の八重桜
五月晴クレーンはピルを積み重ね
心地よき空腹にゐて麦の秋

春の星

大川ゆかり

近づきてげんげ田の紅薄くなる
とり合へず寝れば来る明日春の星
白藤の梳きたる風に包まれて
風みどり島に一軒パン屋さん
燕の子痛さうなほど喉伸ばし
被災地の山の緑の新しく

底辺

辻美奈子

底辺に高さかければ夏立てり
おとうとを兄とも思ふ鉄線花
父の嘘たれも気づかず万愚節
春の亀石のごとくにあたたまり
花は葉にきちんと高校生になる
待つてゐるよと門灯の鹿かな

潮鳴集



五 感

能美昌二郎

髪切つて五感全き夏に入る
夏めくやクルーズ船の千の窓
明け立つや亀裂の走る麦畑
焼さざえ注ぐ醤油の焦げる音
街角の小さき画廊シクラメン

蝌蚪の国

峰崎成規

足と手が出でて戻れぬ蝌蚪の国
殿の惜しめば伸ぶる花筏
黒潮へ加速促す初鰹
寄合を会議と呼んで麦の秋
老舗みなビルに吸はれて街薄暑

速 達

栗原公子

大空へ声すはれゆく麦の秋
伝言のどこで違へし藤の波
速達に切手連なる夏つばめ
朝市の鳴いて買はるる浅蜷かな
老いといふ未知と遭遇藤ゆれて

笙の音

荒井千瑳子

芝桜人語絶ゆれば色展げ
ひと吹きの笙の音白き蛾の翔つは
青あらし樹齢に勝てぬ人の歳
点鬼簿を抜けしか揚羽離れざる
幸せのなんと無防備花うばら

風 流 れ 内 山 花 葉

若葉の炎ふいて劫初の桜かな
鰐口の叩けば澄む音白牡丹
路線図の直線曲線蝌蚪の紐
鮎解禁竿の賑はふ水こだま
若鮎や川の中にも風流れ

単 線 路 佐々木よし子

太陽が島の真上や金盞花
参道の花舗種薯を広げ売る
残照の磯曲に春を惜しみけり
緑さす硝子ドームの乱反射
葛西臨海水族園
熟麦の穂波を分かつ単線路

御 柱 祭 福 島 茂

竜天の地に降りたちて御柱祭
峻厳な山の借景御柱祭
おほかたは漁師の墓石雁供養
大仏に着せたるやうな夜の新樹
愛鳥日望遠鏡を子に譲る

燕 来 る 多 田 ユ リ 子

歓声のごとき海光草萌ゆる
燕来る河口のひかりひるがへし
離陸機の大き旋回百合植うる
竹林の太き雨脚夏きざす
ひと見舞ふ卯月曇りの橋渡り

神 の 木 小 林 和 世

銀の八ヶ岳を背にして御柱祭
縦巨木神の旅路へ御柱祭
木落しの女綱男綱の土煙
川越ゆる勢子も清めの御柱
神の木の木遣に動く日永かな

東 病 棟 町 山 公 孝

南吹く東病棟十二階
葉桜や手帳・鉛筆・木のベンチ
下総や植田の光また光
冷酒や本音は言はぬ髭だるま
信濃路や麦の秋風吹き渡る

沖作品



能村研三選

硯海に弛みて遊ぶ春の月

千葉

坂本 徹

夕東風や旨み深まる吊し蛸

藤代 康明

あたたかや傾聴といふボランティア

青葉光ばらして磨く管楽器

隅つこは楽しきところ蝌蚪の国

高階に水を疑ふ目高かな

野遊の切株に座す昼餉かな

ぜんまいの仕掛けを探る日永かな

日をはじき雨をはじくや柿若葉

散り際の命はなやぐ桜かな

職退いて水色選ぶ更衣

三桎や大人にもある人見知り

また別の親子のしやがむ蝌蚪の水

その靴も出世払ひで蝌蚪に足

サーファーの海鳥めける夕朧

逃水を追うて祭の甲冑隊

塩野谷慎吾

市川市

小林 陽子

神奈川

大矢 恒彦

小川 流子

土手を踏む杖矍鑠と桜まじ
灰神楽たちて野焼の矛納め
貝塚の土器の欠片やうらけし
啓蟄や課外授業の土を踏み
桜薬降るそれからの旅心
母子像の本読む膝に桜散る
日時計の時の薄れて鳥曇
半仙戯抱く子と揺れてゐて不安
さざ波は沼のおしやべり茅花どき
自づから鍬の手の止む初音かな
風揚げを終へて夕空明けわたす
老鶯の濁世に啼いて透きとほる
柿若葉仕立てなほしの風の吹く
蜜豆を食うて秘密を明かさるる

作品 15句選評

*

能村研三

あたたかや傾聴といふボランティア

坂本 徹

「あたたか」には漢字の「暖」か「温」の字を当ててゐるが、どちらとも同じような意味の字だが、「暖」は気候や気温など外界の「あたたかさ」を表す際に使われる。これに対して「温」の方は身体や、心のうちに感じる「あたたかさ」、あるいは中の方からあたためる意味に用いられる。また「暖」が客観的な「あたたかさ」を言うのに対して、「温」は主観的、精神的な「あたたかさ」を表す字だとも言える。しかし俳句では身も心もあたたかになると言う気持を表したいという時は、平仮名表記で使われることが多い。最近、傾聴ボランティアというのがある。様々な相手の方のお話をきくことで、身体、金銭、仕事など悩んでいることを親身になって聴いてあげる。悩みをきくのは単なる「聞く」ではなく「聴く」という積極的で能動的な姿勢が必要なのである。

日をはじき雨をはじくや柿若葉 塩野谷慎吾

若葉は美しい。初夏の陽射しを浴びて萌黄の葉がきらきら輝き、自然と活力が湧いて来る。若葉は柔らかく半透明で、日光を遮るようなことはせず、地面に温かい陽射しを降りそそぐ。中でも柿若葉は別格で、微風にそよぐ若葉を通して来る陽光は人の心をなごませる。

人家の庭先などで見る柿若葉は楕円形の葉をおおらかに広げ、満面に陽光を受けて日をはじき、雨が降れば雨をはじき、初夏のさわやかな気分を感じさせてくれる。

三 極や大人にもある人見知り 小林 陽子

三極は和紙の原料になるが、春を告げるように一足先に、淡い黄色の花を一斉に開くので、サキサクと万葉歌人は詠んだ。まだ他の花が咲き揃わず、寒さも感じる時期でもある。人見知りと云えば幼い児に見られる現象だが、大人になっても初対面の人と中々話せない人や、引っ込み事案になってしまう人がいる。面白い季語と取り合わせた。

灰 神 楽 たち て 野 焼 の 矛 納 め 藤代康明

春先のまだ草木の新芽が出ない時期に、野山の枯れ草を焼く。野焼を行うことで、害虫を殺すことも出来草地のままに維持される。野焼には他に延焼しないよう細心の注意が必要で、常に火を叩く棒や水を用意しなければならない。灰神楽を持って野焼の矛が納められた。言葉使いで俳句を面白くさせた。